

学徒勤労動員と東南海地震



長久手市氏神前
永田 宏さん

当時、私は知多郡八幡町(現在の知多市)に住んでいて、家族構成は、父、母、私と第二人であった。昭和十九年四月、(旧制)中学五年生になった即日、半田市内にあった航空機製作の軍需工場で働くことになった。機体を組み立てるリベットを打つエアハンマーの響き、ガス溶接の埃と臭い、工場全体から湧き上がる騒音の中に、教科書も授業もどこかに吹っ飛んでしまった一年五か月の始まりであった。

一般工員、我々動員学徒(男女)、徴用工員、女子挺身隊員らが渾然一体となって「一機でも多く」を合言葉に頑張っていた。学徒は、県内はもとより、遠く京都、福井、山梨、香川、高知、鹿児島などの各府県からもきていた。休日は、月に二日、支給されたのは南京袋みたいなスカスカの作業服一着だけで、勿論冷暖房などはない。よく夏バテもせず、風邪もひかず保っていたと思う。若さと気が張っていたからであらう。

勤労動員中、忘れ難いのは同年十二月七日午後発生 of 東南海地震である。職場で激しい揺れに気付き、慌てて建物の外へ逃れた直後、土煙をあげて屋根が崩れ落ちた。一瞬の間であった。工場は埋立地に建てられた煉瓦造りの元紡績工場であった。煉瓦が崩れ落ちて多くの工員や学徒が犠牲になった。生死は紙一重、全く運不運という事を痛感した。

八月十五日、終戦の放送は工場で聞いた。ソ連も参戦したし、頑張れ、という放送かと思っていたら、天皇陛下のかん高い悲痛な感じの声にとまどった。「(四国ノ)共同宣言ヲ受諾」で、「ポツダム宣言」の事かと思ひ出し、それを「受諾」とは、と頭が混乱している間にも放送は進み、「堪へ難キヲ堪へ忍ヒ難キヲ忍ヒ」が



聞こえ、「アア、負けたのだ。」と悟った。その夜は、宿舍の窓を開け放し、電灯の覆いを外して、明るさを満喫した。

この数か月、御先真っ暗の閉塞感から俄かに解放されてホッと一息つき、なんとか生きのびることができた、とひそかに安堵したのであった。

現在の想い

永田 宏さん

戦争は絶対に避けるべきである。もしも、第二次世界大戦が始まったら、人類はおろか、地球全体の破滅に至る。戦争になりそうな予兆が発生すれば、些細なことでも摘み取らねばならない。始まってからでは遅いのである。現代の戦争は国家を挙げての総力戦である。一旦始まれば(或いは始まる兆しのある時から)、たちまちモノは姿を消し、値段はつり上がる。日常生活は不合理と非効率に終始する。

暖衣飽食にドブプリ浸かった「戦争を知らない」方々には想像してただけるだろうか。戦争を始めるのは容易である。しかし、これを終息することは難しい。冒頭にも書いたように大事に至りそうな予兆があれば、為政者には速やかに摘み取り、破局に至らぬよう努力を願いたい。一方、我々国民も世界情勢をよく見極め、時流に流されない様、心がけるべきであらうと思う。人生の残り少ない老人の杞憂に終われば幸いである。